

## 食と地域社会との交流を題材とした地域活性に向けた社会実験プロジェクト

(自治体等側) クラブガストロノミー・茨城代表

原田 実能

(大学側) 人文社会科学部人間文化学科・教授

中田 潤

### 連携先

クラブガストロノミー・茨城  
茨城県政策企画部県北振興局

### プロジェクト参加者

中田 潤 (茨城大学教授, クラブガストロノミー・茨城, プロジェクトの企画立案・統括)  
小原 規宏 (茨城大学准教授, 企画・立案・実施)  
原田 実能 (クラブガストロノミー・茨城代表, うのしまヴィラ代表, 企画・立案・実施)  
藤 良樹 (クラブガストロノミー・茨城, 雪村庵代表, 企画・立案・実施)  
原田 広美 (クラブガストロノミー・茨城, うのしまヴィラ, 立案・実施)  
原田 顕命 (クラブガストロノミー・茨城, うのしまヴィラ, 立案・実施)  
藤 由香 (クラブガストロノミー・茨城, 雪村庵, 立案・実施)  
政井 秀勝 (クラブガストロノミー・茨城, 磯原シーサイドホテル料理長, 立案・実施)  
福田 千春 (クラブガストロノミー・茨城, 磯原シーサイドホテル支配人, 企画, 立案・実施)  
和田 昂憲 (ただいまコーヒー代表, 立案・実施)  
長谷川 恭夫 (ワインバー・キルシュ代表, 立案・実施)  
二川 ナオミ (一般財団法人 公園財団, 立案・実施)  
柴田 祥平 (柴田農園三代目, 企画・立案)  
檜村 智生 (檜村ふぁーむ二代目, 企画・立案)  
笹川 雄也 (ほおずき栽培農家, 立案・実施)  
角田 隆司 (ツノダ住宅代表, 立案・実施)

その他補助スタッフ数名

### プロジェクトの実施概要

#### ①プロジェクトの目的

本プロジェクトの長期的な目標は、脱生産主義時代における地方都市およびその周辺地域における住民のライフスタイルと産業のあり方のモデルを提起することにある。冷戦体制下での軽武装・経済発展重視という日本を取り巻く国際環境と、その下で推し進められてきた経済成長至上主義は、思考様式のレベルでなお人々を強く規定している。実際には、それを支えてきた客観的枠組みが、大きく変化している現状があるにもかかわらず、産学官を問わず、その前時代的思考様式からの転換は容易ではないようである。

他方、消費社会論・マーケティング論の領域においては、消費のあり方という視点からではあるが、この脱生産主義社会を見据えた議論が盛んになされている。生産主義的な消費社会のあり方の限界は、茨城県県北地区に代表されるような、人口減少・過疎化に直面している地域においてより顕著に露呈しているにもかかわらず、残念ながらそれを見据えた本格的な議論は今日なお極めて低調である。そこで本プロジェクトでは中期的な視点として、1) 地域社会における人材のデータベース化とネットワーク化を進めつつ、2) 食・宿泊へと集約される地域社会の文化的資源の創造をめざし、それを3) 観光学、社会学、地理学、歴史学といった大学の持つ知的資源を動員しながら、脱生産主義時代における住民の新たなライフスタイルと産業構造として学問的な言説化を図ることを目標とする。そして本申請プロジェクトという短期的な枠組

みにおける具体的な活動として、フュージョン・ダイニングの企画・準備・実施を予定している。フュージョン・ダイニングとは、県内のレストラン・ホテル事業者からなる任意団体であるクラブガストロノミー・茨城のメンバーが企画段階から協働し、特別な形式の食の機会を提供するイベントである。そこには共同で開発したメニューも含まれる。

### トキ消費

消費社会論の領域では、生産力至上主義の時代に対応する人々の消費形態として「モノ消費」、そしてその派生形態である「コト消費」が主流であったことが指摘されている。それが脱生産主義社会への移行にともない「トキ消費」に価値を置く人々が増えていくという。「トキ消費」とは、簡単に言ってしまえば「いまだけ、ここだけと言う価値観の下、他の消費者による再現性の低い「トキ」の過ごし方そのものに価値を見出す」行為である。このトキ消費に価値を置く消費者は、その場、その時のみ消費可能なライブ空間を消費する事で他人との差別化が図られると考えているという。またこの差別化は、単にそのライブ空間に身を置くだけではなく、「参加」する者同士で成立する共同性(=仲間意識, 帰属感), そしてその盛り上がり「貢献」しているという実感によって補強されているという。

### イミ消費

トキ消費は、マズローの言う社会的欲求や承認欲求を消費行動によって充足しようとする行為を言い換えることができるかも知れない。しかしながら消費社会論は、それに飽き足りず、他人や社会、環境に配慮した形での消費を志向する消費者の存在も指摘している。社会学者の間々田孝夫は、「意識的か否かを問わず、自然および社会に対する負の影響を回避し、その安定に資するような消費行為を行なう」消費者の存在を指摘している。彼らは、商品・サービス自体の機能だけではなく、そ

れらに付帯する社会的・文化的な「価値」に共感しているのである。そうした価値として挙げられるものとして「環境保全」、「地域貢献」、「公正さ」、「歴史・文化伝承」、「健康維持」「地産地消」などがある。こうした消費のあり方は、自らの消費行動の意味を問うという文脈で「イミ消費」と呼ばれている。

### ヒト消費

トキ消費やイミ消費が、消費者によって消費される「対象」に着目した議論である一方で、そのトキやイミの「発信者」に着目した議論も存在する。それまでの消費のあり方と比較して、トキ消費やイミ消費は、消費者の側の「参加」、「貢献」、社会的・文化的価値への「共感」に裏打ちされた「再現性の低さ」を特徴としている。こうした特徴を突き詰めていくと、それはある特定の地域に暮らす個人ないし社会集団の「生き方そのもの」に行き着く。そうした人や集団が持つ魅力や物語そのものをエンターテインメントとして捉え、それを消費する行動を、消費文化論者の廣瀬涼は「ヒト消費」と呼んでいる。それは具体的には、クラウドファンディングや「推し活」に代表されるような「応援消費」と消費対象となる人物や集団が辿った歴史それ自体を感動や娯楽とする「物語消費」という形態をとるという。

地域社会における人々の生き様そのものが、唯一無二の再現性の低い消費対象として珍重されるという皮肉な事態が出現しているのである。他方地域社会や経済の活性化を当初の目的として行われてきた地域住民や事業者同士のネットワーク化・協働それ自体が、外部から見れば最先端の消費対象となるという極めて興味深い事態が現在進行形で進んでいるのである。

### ②連携の方法及び具体的な活動計画

本プロジェクトには、茨城大学と県内のレストラン・ホテル事業者からなる任意団体であ

るクラブガストロノミー・茨城およびその協力事業者が参加し、茨城県県北振興局と大子町の協力を得ている。

本年度の具体的な活動の中心には、昨年同様食文化・滞在型文化型の事業モデルとしてのフュージョン・ダイニングの企画・準備・実施がある。またその準備には、イベントそのものの準備だけではなく、前述したような社会構造そのものの長期的な変化とそれに伴う消費形態の変化についての洞察も含まれている。そのためこうした視点を体系的に学ぶことを目的としたワークショップの開催も予定している。

プロジェクト全体の企画・立案には、クラブガストロノミー・茨城、茨城大学の中田・小原が参画し、その統括には中田があたる予定である。イベント全般の運営は、クラブガストロノミー・茨城に参加している事業者があたり、それに協力者として日立、水戸などの事業者も参画する予定である。

### ③期待される成果

プロジェクトの目的においての部分で述べたように、地域活性化の観点から行われる事業者、生産者間のネットワークの構築と協働そのものが、最先端の消費論の観点からみた場合、魅力的な消費対象となっている。そこで以下に列記する個々の項目は、地域活性化策であると同時に、観光振興策の側面を持っており、さらに近年「交流人口」といった概念で把握される、新しいタイプの人々のネットワーク・コミュニティ形成の触媒にもなっている事実も特筆しておきたい。

- ・地域社会における人材を含めた文化的資源のデータベース化とネットワーク化

- ・地域社会の活性化のために風土、伝統、文化資源の動員・ネットワーク化が有効であることを実証的に示す。

- ・こうした資源・ネットワークの可視化のための作業として食文化・滞在型文化型の事業として提示することが有効であることを示す。

- ・活動を通して得られた知見を、大学教育・市民教育を通して学生、市民に理論化して提起することにより、学生・市民が活動の主体となることのできるような意識を涵養する。

- ・観光学、社会学、地理学、歴史学といった大学の持つ知的資源を利用しての地域活性化策の再定義ならびに方向性の検討

- ・地域社会・地域外社会への事業の情報公開

## プロジェクトの実施成果

### ① 活動実績

これまで述べてきたような理念を実際の活動の中にどのように落とし込んでいくのかという点が、本プロジェクトの主要な関心事となる。

その最も中心にある活動が、社会実験としてのフュージョン・ダイニングとその準備作業ということになる。

### 計画の年度内実施の断念と延期

当初の計画では、2月に茨城県・大子地域でのフュージョン・ダイニングの実施を計画し、関係施設・自治体関係者との調整作業も目処がついていた。しかしながらクラブガストロノミー・茨城の活動において中心的な役割を果たすメンバーが、長期療養が必要となる状況が発生し、年度内の計画実施を再検討しなければならなくなった。メンバー内で議論した結果、年度内の計画の実施は断念するものの、前回のイベント参加者等の関係各面からの反響が大きいため、翌年度以降に実施を延期することにした。それゆえに、本年度のプロジェクトとしては、残念ながら活動実績を示すことができないという状況となった。

### ② プロジェクトの達成状況

本年度の事業としては前述のような状況となったが、準備作業自体は一定程度の達成された状況にある。前述の目的の項目で指摘したようなイミ消費の側面を実体化する空間として、イベントの場所選びは本プロジェクト

において重要性が高いが、そうした条件に合うような施設と交渉を行い、協力を取り付けている。そうしたものとして大子町の古民家「旧吉成邸」、常陸太田市の「菊蓮寺」、枕石寺」そして石岡市の「いばらきフラワーパーク」などがある。またガストロノミー・茨城としてホームページを開設し、活動の周知を図る体制を準備中である。

### ③ 今後の計画と課題

連携対象であるクラブガストロノミー・茨城の活動は、自治体等とは異なり、基本的にボランティア・ベースで回っている。また十分なマンパワーを有している訳でもないので、今回のような事態が発生する可能性は排除できなかったが、実施に年度内実施が不可能になってしまったことは残念である。ただし活動自体は着実に前進しているので、活動実施のテンポ感についてもう少し検討を加える必要があると考えている。また可能な場合、大学との連携という形も考えていきたい。